

忘れ得ぬ私の手記

福岡県 香田 照夫

昭和十二年七月ごろ、市内で〇〇方面の軍属募集があり、満州であることは分かっていたので志願し三回目採用となった。家族同伴も許可があり小倉造兵廠へ呼び出しを受け渡航することが決定した。

同年の九月に下関港を出発し、目的地は満州国奉天省遼陽出張所付警備隊員として赴任し、遼陽出張所長の今大尉の指揮のもとに勤務することとなった。なお、正式には南滿陸軍造兵廠としての名義であったが、建設途上のため工廠も陸軍官舎もなく、一般官舎は元の満人家屋を改造したもので、生まれて初めての満人家屋に起居することに少し心に抵抗がありました。辛抱しなくては毎日警備教育が日常の仕事でした。日本語の分かるボーイが良くやってくれました。

翌々年にやっと現地に工場地帯の工事も進み、同時に

東京陵と言う工場地帯より一里位離れた所に軍人軍属の官舎も工事が進み、私たち家族も新築の官舎に住むことになり正式に桜ヶ丘と命名され春日町の一番号一室が私の自家になりました。部隊名も南滿陸軍造兵廠遼陽出張所中橋隊となり陸軍大佐中橋桂次郎の指揮下になり副官は政井中尉この人は兵役中尉でした。

直属はここから政井中尉の指揮下に警備隊に入り、勤務の途中で副官に呼び出されて極秘の命令を受け、警備隊の多くの中から五人程優秀な警備員を採用し、警備隊とは別行動の特務を編成し治安確保に全力を尽くせとの命令があり、先輩の田村警備取締、私もそうでしたが二人で相談し外三人計五人をもって表面は特別小隊として発足治安に当たったわけです。

その間、日本軍属及び中国人の中で、あらゆる犯罪者を逮捕し名声が部内に広がりその功績が認められ憲兵隊の知るところとなり、副官政井中尉の推薦で我が隊に憲兵伍長二人が派遣され我等と合流、終戦数か月前に二人の憲兵は南方へ派遣され出兵したまま消息がなく、終戦時まで五人の特別警備隊と正式警備隊との情報交換をし

ながら終戦を迎えました。

終戦後はしばらく負けたことを知らず終戦を知ったのが八月十八日でした。三日遅れで知り、後は聞いたことです。日本が負けたことを知った関東軍の指令部は八月十五日前、飛行機で家族同伴で内地へ逃げたと情報や噂がもっぱらでした。終戦までの話はここまでで終わり終戦から内地引揚までを書きたいと思います。なかなか細かいことまで手記に馴れませんので略して簡単に申し上げます。

まず終戦後ソ連兵進駐という事態になり、ソ連軍遼陽地区司令官の命により軍人軍属は全員シベリア行きと部隊本部に連絡がありました。その前に当期中橋隊から異動があり林陸軍少尉が終戦当時の部隊長でした。その林閣下はソ連の命令でスターリンの革命記念日という招待を受けそのまま他所へ連行されていたのです。シベリア行きをソ連が慣行させるならと浜本大尉が一人でソ連駐代司令と話し合い、ソ連が交渉に応じない時は我が部隊は全員玉砕するのだと言残し、ソ連司令のもとへ浜本大尉は出掛けました。

ソ連指令官に会い、部隊事情や玉砕の話をしたところ、ソ連司令官は了解し貴隊は物資があるため番外でシベリア行きに應ずる必要なし、そのかわりにソ連警備隊を派遣することを司令官と浜本大尉と交渉が成立、浜本大尉としては我が隊内は三時過ぎると玉砕の打ち合わせが出来ているので、大尉は玉砕させてはならぬと心配のあまり、遼陽市内から軍刀をさげたまま帰隊を急いでいた。

部隊の方では浜本大尉の帰隊を今か今かと待ち、浜本大尉の返事を聞かなければ講堂の地下に準備した黄色薬一屯が爆発する。建物兵舎その他、施設はおろか何にも残らない事態になり生き延びたい軍人軍属の家族は半道以上に離れないと危険と言う。男がシベリアに強制収容されれば女子供だけでは孤立し、男が居ないとソ連兵や中国人、満人にどんな目に会うかも知れない、いっそのこと三時まで大尉が帰隊しない時はいさぎよく玉砕しようとして玉砕講堂に正服姿の軍人軍属の家族が集まっていた。

三時になったら点火役特務の田村氏が任命されて待ち、三時五分前に連絡員の一人浜本氏が帰隊したと連絡があ

り、浜本氏の姿が遂に見えた、点火をするなの声、田村氏も確認をした。点火を中止し講堂内の皆に知らせ、時間通りに浜本氏が帰隊したので少しは安心した。やがて大半の人々は講堂の外へ出た。浜本氏の報告によると大隊の軍人軍属一同今までのまま生活してもよい、なお女子供にソ連兵は手を出すことを禁じたとの司令官の言葉を報告したので一同安心して解散し官舎に戻っていた。なかには薬を各自が持っているので自決した家族もいた。多くは自宅へ戻ったようであった。

私も妻や女中、子供を連れて官舎に戻り生活していたが、二十年の十二月中旬過ぎに、突然、私の官舎を共産軍が包囲し三、四人が土足のまま屋内に侵入し、お前は香田かと聞く、そうだとすると兵器を持っていたはずだと出せと言うので、武装解除の折に提出しソ連軍に渡したと言うが聞かず、家宅捜査すると家の中を調べ始め一室一杯に衣類家財道具を放置したが、拳銃を持っていたのはどうしたと聞く、これも解除と同時に出したと言ったが嘘を言うなど捜査を続けた。いくら捜しても出ないの

かけ表の馬車ターチョに乗せ護送繩をかけ、両方に一人左右に護衛し拳銃をつきつけ出発し、遼陽市内の城内を通過元日本人の警察署の留置場に入れられた。

その後毎夜九時ごろから夜中に調べが始まり、調査の内容は今までにどんな犯罪者を何人位検査したか、何人位送検したか、その他部隊では誰が、なんとという人は個人財産があるか、お前はどの位の財産があるかなどを調べ、知らぬと言うと裸にして四人掛りで蹴る、なぐるの拷問、鼻から出血、体は打撲傷で痛い、痛いと言っておれない状態であった。これが一週間位続いて身うごきが出来なくなつた。これで私も死ぬかと思つた。

ある朝十時位だったと思うが保安隊老人の声が一段と大声で聞えて来て、良く聞くと団長を出せと大声。係の兵士が玄関に出たところ団長に交渉があるという。団長が出たようだと静かな話声にかわつた。何の話をしたか私には不明です。ところが留置場番兵の一人が、香田お前は藍と言う人を知っているか、知っておるとその藍の母が今団長と話しているという。それから三十分位して藍の母が留置場に来て香田さん、香田さん、と呼

ぶので留置場の一番奥に伏していた私が顔を起して、たしかに藍ウイトクの母親と確認した。先夜の取調べで全身動けないことを知って、兵士二人入ってきて私を抱えるようにして留置場の入口まで連れて来て母親に会った。

母親は団長に相談して明十時に釈放ときまった。明日再度身の引受けに来る、今息子は四平街の八路軍の自動車隊の団長になっているとのこと。私の身柄を逮捕した団長は聞くと藍ウイトクが八路軍では先輩であったので、母親の言うことに賛同したことが分り、二、三日内には息子に連絡してあるのでお宅へ来ますと言う話。今何が要るかと尋ねるので、煙草が吸いたいと喫煙のポーズをするとポイに買いにやらせ、久しぶりでしかも藍のお陰で助かった。今からすぐ官舎の奥さんに、夫が米や牛肉を持って行くから栄養をつけなさい奥様が心配しないようにと毛布を差し入れしてくれました。

翌朝十時ころ部隊の将校や軍属と藍の母親とが身元を引受けて手続終了し、団長以下が玄関で見送り釈放された。後で聞いた話では母親は逮捕を命じた団長に金一封十五円と身柄引取りに来た場合、後の十五円を約束した

ので、当時私は三十円で身柄釈放になったものと思う。外国人でもなかには義理人情の厚い人もいることを考え内地に無事帰郷したら二度と人を調べる仕事はしないと心に十分言い聞かせ、引揚後は社会のためボランティアの仕事は今まで続けている。貧乏はしても人のため世のために尽すことを念頭に考えております。

釈放され官舎で静養していると、二日後に我が隊の陸軍病院長の岡野大尉が来てくれて健康診断をして驚き、よくも生きて帰隊が出来た、今晚から一時入院しなさい、これだけの打撲傷や内臓が悪いと危険だということで早速入院。個室に収容して貰い一週間位で健康を取り戻したように見えた。

その時、保安隊が異動した後任の団長が、再調査をするので再度私を拘束するという情報が入ったので、夜陰に乗り病院に置手紙を残し脱院した。目指すは奉天市内。元部隊の建設は大倉組企業と清水組が専属で火薬工場、陸軍官舎の建設に従事し清水組の所長の白水所長は奉天中であつたので、一応落付くまでと思いい二日がかりで奉天市内の白水氏宅に無事到着し、事の次第を打ち明け、

内密に妻にも住所を知らせて置き、私の行動はすべて夜間、昼間の行動は大危険である仕事が仕事だったので危険性が大きく夜間作業でも満人は殆ど知っていた。

それから白水氏宅で十日位を経て妻の方から私の従兄弟の小柳明治氏、現在横浜市に居住の彼が、私は勿論家族にも危険が迫っているので明治氏と話合せて、今晚我が隊を脱出しないと家族を人質にすると団長が命令したそうで、昼間家内に準備させ今晚十一時ころに起こして脱走を実行すると連絡し、行動については奉天の私は知る由もなく、ただただ小柳氏と家族女中まで四人の無事を祈る外はなく翌朝、小柳氏と家内、女中、子供たちが雪の中を歩き隊の脱出を決行。

鉄条網を破り、小高い山を登り、雪の中子供たちにも勇みを付け、お父さんの所へ行くんだと気合いを入れ、寒空の中を張台子という駅までたどり付き、駅の中をのぞくと日本人駅長が一人、ソ連兵が一人居るが、駅長の話では寒いので昨夜ウォッカを飲み過ぎ、ぐっすり寝ているので大丈夫、香田さんは良く知ってお世話になりましたという。家族の危険を話すと快くストローブをたいて

濡れた衣服を乾かし、小さい駅で通過してしまうがお互い機関士も日本人同士だから、朝一番貨物列車を停車させ便乗させる、と話してくれた。

午前一時四十分ころ予定の列車がホームに入った。駅長は駆けより機関士と打ち合せ、早速便乗させてもらうことになり家内も安心しました。機関助手の心配は奉天駅は大丈夫でも、こん河という大橋があり、そこはソ連の駐屯地で衛兵が汽車を停止させ調べると言うこと、そこで機関士と助手、明治氏と三人で機関車の石炭を手前に出し、石炭倉庫に家族全員を入れ前の方をカムフラージュして、ソ連兵が乗車したら助手は石炭を少しづつ釜にくべ、約十五分でソ連の検査が終了「ハラッショ」良しと出発。機関士と全員が安心し、家内は心からお礼を残し予定通りに奉天駅構内に入った。

瓦斯会社がB29にやられた地点で幸いにして列車の信号が赤であったので停車し、機関士の指令で家族が下車し全員揃って私のいる白水宅に着いた。朝がやっと白らけたところで、その時白水の長男が小さい小窓から見張りをしていたところ、おじさん、おばさんたちが来たよ！

大声で白水家も私も飛び上り、何人来たねと聞くと六、七人いるよ、おばさんは赤ちゃんをおぶっているよ、私も長男照昭をおぶっての脱出であった。

お陰で皆々の関係者の方々が生命をかけて助けてくれたお陰で本日まで無事生計を保つことが出来ました。妻も本当に引揚までまた引揚て来てからも並大抵でない苦勞をし四十四才で他界したが、子供たち全員、私を含めて健康であり。あの時、あのころを思い忘れることはないと思う。

なかなか書き表わすことは難しく不明の点はよろしく理解して下さい。まだまだ私より以上の危険に苦しまれた方々も多いと思います。戦争がもたらしたこのような手記を読み、これからは戦争を絶対に無くしましょう。

栄光と苦勞満州奉天引き揚げ者

東京都 山口 是知

私は昭和二十一年八月十五日満州奉天から長崎に引き揚げた者である。

第二次世界大戦は、枢軸国側に不利となり、まずイタリヤが連合国に降伏し、ついで昭和二十年五月、ドイツが降伏するにおよび、日本ひとり連合国と戦争をつづけるにいたった。戦局は日に日に悪化していた。沖繩が占領されるにおよび、敗戦は決定的であったが、私はなお最後の神風きたるを信じていた。

しかるに八月九日、ソ連軍参戦におよび、戦局は急速に悪化した。広島、長崎に原爆が投下されたことが日本の降伏にいたらしめた大きな原因ではあるが、われわれ在満州にとっては、ソ連の中立条約を破棄した南侵こそ決定的な打撃であった。

北滿開拓団員が銃をもち、妻子の手を引いてぞくぞくと奉天に南下してきて、事の一大事を悟った。在奉天の日本人老幼婦女にも避難命令が出たが、わが家は、いわ